広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	菅茶山の政治批判詩について
Author(s)	西原，千代
Citation	中國中世文學研究 , 54 : 133 - 155
Issue Date	2008-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051408
Right	
Relation	

菅茶山の政治批判詩について

西原千代

茶山成年後の生涯は「京都遊学の時期」（十九歳～三十三歳）と「神辺定住の時期」（三十三歳～八十歳）の二期に纏めることができる。詩はその人の生活が反映されるものであるから、その作風つまり詠われる内容と、自分の思い、表現の方法は、生活環境の変化によって変わってくる。茶山の場合も遊学期前半と後半、遊学を終えて神辺に帰り郷里に落ち着いてからも、青・壮年期と晩年とでは作詩の内容や表現の方法が変化している。

遊学期の前半は表現や語句に凝って、繊細で綺麗な詩を作っているが、遊学期も後半に入ると政治批判の詩を作り始めている。郷里に帰って落ち着いてからも十年余りは、政治批判詩を作っているが、晩年には農村の自然や、そこに暮らす農民を題材とする「農村詩」が多くなり、歳を重ねるに連れて、農村に於ける子どもたちの純真な言動を詠う詩が多くなってゆく。茶山は友人・知人・文人・墨客など交友範囲が広いので、その人たちとの応酬詩や題画詩も多く、又、旅も好きだったので交遊詩や紀行詩も数多く残されているが、茶山の詩の持ち味は、やはり政治批判詩・農村詩・子どもを詠う詩に特によく示されている。この度はこれらの詩の中から、「政治批判詩」を取りあげることとする。

一　京都遊学後半に於ける政治批判詩

従来、茶山の詩は「農村風景詩」に見るべきものが多く、それこそが茶山の真骨頂のように喧伝され、「政治批判詩」についてはあまり論じられていない。しかし、京都遊学の後半あたりから茶山は頻りに「政治批判詩」を作っているし、郷里に帰ってからも十数年間は、拙齋や他の同志と共にそういった類の詩を多く作っている。

1　西山拙齋との出会いとその影響

茶山の京都遊学は明和三年（一七六六）十九歳から安永九年（一七八〇）三十三歳までの十四年間である。初めは市川某に古文辞学を、和田泰純（東郭）に医学を学んだ。病弱だったこともあってその間に、郷里に帰った

り上洛したりを六度繰り返している。

明和八年（一七七一）に茶山は西山拙齋と初めての出会いを持つ。それは茶山が三回目の遊学から神辺に帰っていた時であった。そのとき二人は三原に梅を見に出かけている。茶山が四回目の遊学をするのは、その翌年の安永元年（一七七二）であるが、この時から古文辞学を廃して那波魯堂に師事し朱子学に転向した。これは西山拙齋の説得に因るものと考えられる。確かな資料がないので推測の域を出ないが、拙齋は十六歳で大阪に出て、古林見宜（正桂、一六九四～一七六四）に医術を、母方の縁者である岡孚齋（白駒、一六九二～一七六七）に儒学を学んだ。孚齋は衰老であった為、外孫である那波魯堂に師事することとなった。茶山は「拙齋先生行状」で次のように述べている。「魯堂も初めは岡孚齋に師事して護園（徂徠學）を信じていたが、その否を悟り更めて程朱諸公の書を取り、従容潜玩して、心に会するところがあった。」と。拙齋は朱子学に転向した魯堂からの説得に、朱子学の正しいことを認識した。そこで茶山と共に三原に観梅した時、おそらく茶山を説得したものと考えられる。年譜に依ると安永元年には、拙齋も茶山も共に上洛して魯堂の元で学んでいる。二人で江戸に向かう佐々木良齋（聖護院王府の長史）を送って、近江国粟津の義仲寺にも遊んでいる。『拙齋西山先生詩鈔』にこのとき作った詩が載せられているし、茶山は「黄葉夕陽村舎文」巻之四に「題義仲墓詩後」と題してその時の事を述べている。又、「西山拙齋年譜」（花田一重『西山拙齋傳』）によると、次の年の安永二年（一七七三）八月には拙齋と茶山は魯堂に従って洛西の西岡に遊んでいる。

茶山と拙齋との交友は、明和八年（一七七一）の初対面以来、拙齋が亡くなる寛政十年（一七九八。六十四歳）まで変わることなく続いた。拙齋は茶山にとって掛け替えのない友人であり、畏敬の念を抱いて師と仰ぐ存在でもあった。「我が国の政治は幕府ではなく、天皇が行うべきである」とする拙齋の考え方に茶山は強い影響を受けた。茶山が政治批判詩を作り始めたのは拙齋との交友が始まった頃からである。

2　京都遊学後半の政治批判詩

『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一の詩は、京都遊学時期に作られたとされているので、その中から政治批判詩を抜き出してみる。

『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一には次のようなものが挙げられる。

①「閑谷」、②「有鳥」三首、③「御領山大石歌」、④「秋半」六首、⑤「偶作」二首、⑥「耕牛」、⑦「龍盤」、⑧「時情」等である。それぞれ内容を見てゆく。

①「閑谷」（全　四十二句）

初めの二十八句は概略のみとする。

緑の続く丘陵地帯、曲がりくねる一本道を川沿いに行くと、突然目の前に高く聳え立つ学堂が現れた。こんな岩や林に囲まれた中に、こんな立派な学習の場があろうとは思いもしなかった。村民は素朴で実直、昔ながらの美風を備えている。考えてみると芳烈公（池田光政）の代になって資金面でも運用面でも豊かになった。大役の後（池田光政公の祖父輝政も、父利隆も関ヶ原の合戦や大阪冬夏の両陣で功績があった）だというのに、行政組織がよく整っている。

方今　時雍と稱し、郡國　荒凶少なきに。
如何ぞ　民逾よ窶しく、府庫　動もすれば輙ち空なり。
節用と聚財と、其の法　或いは未だ工みならざらん。
財を生ずるに大道有り、萬世　行へば斯に通ず。
宇宙は軌　異なるに非ず、君民は體　固より同じ。
誰か能く其の本に反かん、恩を推さば三農を蘇らせん。

方今稱時雍、郡國少荒凶。如何民逾窶、府庫動輙空。
節用與聚財、其法或未工。生財有大道、萬世行斯通。
宇宙軌非異、君民體固同。誰能反其本、推恩蘇三農。

［時雍］和らぐこと。［府庫］藩の蔵。［君民體固同］『礼記』緇衣に「民以君爲心、君以民爲體」（民　君を以て心と爲し、君　民を以て體と爲す）とある。［推恩蘇三農］「推恩」は主君が恩愛を及ぼすこと。「三農」は春耕、夏耘、秋収をいう。

現今　和やかに楽しむと称して、郡国に荒凶が少ないのに。どうしてか（福山藩の）領民はますます貧しく、藩庫もどうかすると空っぽである。費用の節約と財源の調達と、其の方法が或いは未熟なのだろうか。財を生ずるには正当な道があり、万代行えば則ち通じるものだ。天と地の軌道の秩序は別々のものではなく、主君と人民の関係も勿論一体である。誰がよくその根本に背こうか、（主君が）恩愛を及ぼせば農事は蘇るだろう。

人里離れた山の中に、目を見張るような立派な学舎がある。備前池田藩の行政組織が良く機能している証であろう。それに引き替え我が藩（備後福山藩）の政治はどこか間違っている。天地の軌道が整っていれば、自然界は安泰であるように、君民の関係がうまくいっていれば世は良く治まるであろうに。「推恩蘇三農」には、主君の政治の在り方に対する批判が籠められている。

②「有鳥」三首　其の一

鳥有り　丹穴より來り、雛を將ゐて城門に息ふ。
音聲は人をして　悦ばしめ、毛彩　人をして　眩ましむ。
自ら鳳凰の使と稱し、頗る能く威權を張る。
身を攫てて鴛鞏を嚇し、毛を刷きて鵷班に狎る。
雑禽は武を接して至り、嬌媚　各の先を争ふ。
爪牙と羽翼と、儔侶は　日に滋繁く。
且つ謂ふ　此の時を失せば、何れの日か美鮮に飽かんと。
群噪　欲する所を逞しくし、四境　自ら騒然たり。
此の鳥は本　微賤にして、貪狡なること烏鳶に比す。

既に厨廩に巣ふを許さるれば、誰か噬呑を恣にするを禁ぜん。
既に樞要に居るを許さるれば、誰か凶殘を播くを禁ぜん。
君は自ら百禽の長なれば、姦鳥の言に惑はさるること勿れ。」

有鳥丹穴來、將雛息城門。音聲令人悅、毛彩使人眩。
自稱鳳凰使、頗能張威權。攫身嚇鶩輩、刷毛狎鵷班。」
雜禽接武至、嬌媚各爭先。爪牙與羽翼、儔侶日滋繁。
且謂失此時、何日飽美鮮。群噪逞所欲、四境自騷然。」
此鳥本微賤、貪狡比烏鳶。既許巣厨廩、誰禁恣噬呑。
既許居樞要、誰禁播凶殘。君自百禽長、勿惑姦鳥言。」

[有鳥丹穴來]「丹穴」は、伝説上の山名。金や玉を産出するという。(『山海經』南山經)。ここでは江戸のことか。**[鳳凰]**藩主阿部正倫を指す。**[鶩輩]**家臣たち。**[君自百禽長]**「君」は、福山藩主を指す。

丹穴から鳥がやってきて、雛を連れて城門に住み着いた。その声は人を悅ばせ、羽の色は目を眩ませるほどだ。鳳凰の使いだと称して大威張り。その身を欹てて小鳥たちを威嚇し、身繕いして大鳥に狎れ狎れしくしている。」小鳥たちは此の鳥の後に付き歩き、競ってご機嫌をとる。その爪牙となり羽翼となって、仲間は日増しに増えていく。此の機会を失えば、いつ御馳走にありつけるかわからないと。鳥たちが騒ぎ立てて欲を張るので、藩内は騒然となった。」この鳥は本は微賤の出で、欲張りで狡猾なことは烏や鳶のようだ。(藩の)台所に住み着くことを許されているので、恣に私腹を肥やすのを誰も禁ずることはできない。樞要の地位に居ることを許されているので、残忍な行いもしたい放題だ。主君は百禽の長だから、どうぞ姦鳥の言に惑わされないで欲しい。」

1～8句—貪欲な鳥が雛を連れて城に入り、鳳凰(江戸にいる藩主)の使いと稱して小鳥(藩の役人)たちを脅し、鵷鶵(藩の重役たち)の機嫌をとっている。9～16句—小鳥たちは先を争って貪欲な鳥のご機嫌を伺い、その仲間は日ごとに増えている。かくて藩の内外は騒がしくなった。17～24句—この鳥は本は微賤であったが、烏、鳶のようにずる賢く、台所や米倉に巣くうことを許され、枢要の場所に在るので、誰も手が出せない。わが君は百禽の長なのだから、どうかこの邪悪な鳥の言に惑わされないようにしてほしい。

「其の二」の内容

この貪欲な鳥は、自分の欲を満たすために小鳥を脅して其の食べ物を奪っている。「君」鳳凰は梧桐の枝に棲んでいるために、この事は全くご存じない。このままにしておくと大変なことになる。その悪事を「鸚鵡の舌」を借りて告発し、「鵰鷲の爪」を借りて退治してしまいたいものだ。

「其の三」の内容

この悪鳥の仲間は次第に増えている。その中の「鬼雀」が「仙鶴」(悪鳥の誘惑に乗らない人)に、痩せ我慢せずに仲間になったらどうかと勧める。仙鶴は再三溜息つき

ながら、「誰か識らん霄を凌いで飛ぶ我が姿。汚れた肉など欲しくもない」とそれを拒否する。

なお「惡鳥」は誰を指すのか。詳しいことはわからないが、藩主阿部正倫が江戸で召し抱えた山本弁助（田沼意次の側用人三浦某の弟）であるとか、また藩の勘定総奉行、遠藤弁蔵を指すとか言われている。

③「御領山大石歌」（全 十八句）

初めの八句は概略のみとする。

御領山の頂上には 大きな石が多い。群れ、重なり合い、険しさを競っているようだ。山のように大きいもの、家屋のようなもの。放牧された牛のようなもの、様々な形をしている。猜忌の多い世間に嫌気がさすと、知覚の無いお前たちが 楽しくなり度々やって来る。今日も一杯の酒が胸に秘めた思いを呼び起こした。暫く心の赴くままに歌おうと思う。適当に聞き流してくれ。

如今 朝野 因循を尚び、
苟しくも 爲す所有らば 渠の嗔りに觸る。
憐れむ 子が剛腸 誰か采録せん、
如かず 聾黙して其の身を全うせんには。」
石よ石よ、林栖野處に其の所を得よ。
韜晦し 慎しみて囂塵に近づくこと勿れ。
仙に逢ひ 羊と化するは 已に多事、
僧に參じ 經を聴くは 子が眞に非ず。」
況んや 建平に界を爭ふの吏と作るをや。
況んや 下邳に書を授くるの人と爲るをや。
如今朝野尚因循、苟有所爲觸渠嗔。
憐子剛腸誰采録、不如聾黙全其身。」
石兮石兮、林栖野處得其所。韜晦慎勿近囂塵。
逢仙化羊已多事、參僧聴經非子眞。」
況作建平爭界吏。況爲下邳授書人。」

＊安永八年（一七七九）、三十二歳の作。［御領山］広島県深安郡神辺町上御領（神辺平野の北東端に当たる）にある山。［因循］古い習慣のままで改めない。［剛腸］強くてものに屈しない心。［采録］取り上げて記録する。［聾黙］耳の聞こえぬふりをして黙っていること。［林栖野處］俗世間を離れて林や野に住むこと。［韜晦］自分の学問・才能などをつつみかくして愚者を装うこと。［囂塵］やかましくよごれた俗世間。［逢仙化羊已多事］『神仙伝』（二）「黄初平」に見える「石を叱して羊と成す」の故事。［多事］煩わしいことが多い。［參僧聴經］『呉郡諸仙録』に見える「生公説法頑石点頭」（生公、法を説いて頑石 点頭す）「頓悟成仏説」を唱えた東晋の竺道生が虎丘山で経を講じたとき、参集する者がいないので、庭石を集めて聴かせたところ大事なところで石がみな頷いたという故事による。［建平爭界吏］「建平」は三国の頃、四川省の東端、空霊峡と呼ばれる揚子江の峡谷のあった郡名。『水経注』三十四の江水二によれば建平と宣都との二郡の境にある山の上に、二人の男が袂をまくって争っているような形を

した奇岩が立っていて、両軍の役人が境界を争っている姿に似ていたという。［**下邳授書人**］『史記』留侯世家の張良の故事。下邳は江蘇省邳縣の地名。

この頃は朝野とも しきたりばかりを尊重して、かりにも何かしようとすると彼らの怒りを買う。気の毒に思う、お前の気骨を誰も認めないからには、聞かず言わずで身の保全を図るにこしたことはない。」石よ 石よ、お前は 人里離れた林や野が 似合いの場所であり、身を隠して 注意深く 世間の雑踏に近づかぬがよい。石になっていた羊が 仙人に逢って もとの羊に戻してもらったなど いらざるお節介、石が高僧の話を聴くなど お前の本領ではあるまい。」ましてや 建平郡にあって 境界を争う役人の代役になど なりたくもあるまい。ましてや 下邳で 漢帝国創業の功臣 張良に三略を授けたという黄石公になろうとも思うまい。」

御領山は神辺平野の北東端にある標高二三四メートルの山で、山上の山肌には岩石が露出し、八丈と呼ばれる大岩は有名である。この詩はその山の石に語りかける調子で、九句目から時勢を慨嘆しており、「石」は西山拙齋を準えたものであろう。「この頃は朝も民間も古いしきたりばかりを尊重して改めない。かりにも何かしようとすると朝野の権力者らの怒りを買う。お前の気骨を認めて採り挙げてくれるような人はいないだろうから、何事も聞かざる 言わざるで身の保全を図るにこしたことはあるまい。愚者を装い、汚れた俗世間に近づかぬがよい」と時勢を慨嘆している。

⑥「耕牛」

一たび刀剣を耕牛に換へて從(よ)り
四國 謳歌すること二百秋
魯・衛の粢盛(しせい)は 賈竪(こじゅ)に依り
金・張の儀貌は 伶優に學ぶ」
青山 地有りて 人は爭ひて墾(ひら)き
碧海 邊(はて)無くして 水は 自ら流る
古(いにしへ) 自り清時 總て此の如し
迂儒(うじゅ) 何ぞ問はん 杞人(きひと)の憂(うれひ)」

一從刀劍換耕牛、四國謳歌二百秋。
魯衛粢盛依賈竪、金張儀貌學伶優。
青山有地人爭墾、碧海無邊水自流。
自古清時總如此、迂儒何問杞人憂。」

［**魯衛粢盛**］「魯衛」は、中国の周王朝の一族の者が封ぜられた國で、徳川幕府の御三家のような存在。「粢盛」は、祭祀の供物。「賈竪」は、商人ども。［**金張儀貌**］「金・張」は、漢代の金氏、張氏で、時の権力者を指す。「儀貌」は、威張って格好をつけること。［**伶優**］は役者のこと。［**迂儒**］世間知らずの儒者。自分のことをいう。［**杞人憂**］「杞憂」のこと。取り越し苦労。『列子』天瑞篇にある故事。

刀剣を耕牛に換(か)えてからは、國の内は太平を謳歌すること二百年。「魯や衛」では 祭祀の供物は商人任せ、「金氏や張氏」の威張り様は 役者の真似ごと。」青山の地

を 人々は競って開墾し碧の海は果てしなく 水は自然に流れてゆく。昔から好く治まった世は 総てこんなもの、私などが余計な心配をすることもあるまいが。」

御三家や親藩では、先祖の祭祀における供え物などは全て商人任せだし、重臣たちの威張り様は まさに役者の物まねでも見ているようだ。上から下まで天下の政治は形骸化していて、これでは実際の効果は望めない。さすがに茶山も匙を投げているようだ。

⑦「龍盤」

龍盤 虎踞 帝王の都
誰か見ん 當時の職貢圖
祭祀 千年 周の雅樂
朝廷の一半は 漢の名儒」
世情 頻りに浮雲を逐ひて變じ
吾が道 長く片月に懸りて孤なり
古を懐ひて宵を終ふるまで 愁へて寐ねられず
城鐘 數杵 栖烏を起す」

龍盤虎踞帝王都、誰見當時職貢圖。
祭祀千年周雅樂、朝廷一半漢名儒。」
世情頻逐浮雲變、吾道長懸片月孤。
懐古終宵愁不寐、城鐘數杵起栖烏。」

［**龍盤虎踞**］帝王の都の形容。龍が盤まり虎が踞っているような雰囲氣のある地勢。そこは王者の現れる土地とされる。風水の考え方。［**職貢圖**］古来、各地からの貢ぎ物（産物）を記した圖。［**周雅樂**］朝廷に伝えられた正しい音楽。「周」は、周王朝。理想的な政治が行われていた時代。［**漢名儒**］漢代の優れた儒学者。

京都は龍が盤り虎が踞ったような帝王の都であるのに、嘗ての「職貢圖」は今や見ることもない。朝廷の祭祀にあたっては千年もの間「周の雅楽」が奏され、朝臣の半ばは「漢の名儒」が占めていたのに。」世情は頻りに「浮雲を逐う」ように變化して、吾が道は 適えられず「空に懸かる片割れ月」のようだ。昔を懐って宵の終るまで愁えて眠られず、城の鐘が数回 塒の烏を目覺めさせる。」

かつては朝廷を中心に行われてきた日本の政治も、今や幕府が行うようになって昔の面影は無い。世の衰えが嘆かわしくて夜も眠れないでいる。

これらは貪欲な惡人の為すがままになっている福山藩の現状、緊張感を欠いた親藩の政治、朝廷が全く無視されている現状を批判し慨嘆する内容であるが、批判の対象は大まかで具体的ではない。批判の対象が絞られ、悪政の内容が具体的に述べられる神辺定住後の作とは、そのあたりが異なっている。

その他の作の内容は次の通り。

④「秋半」六首

（一）秋半ば農家は最も忙しい時なのに又、出役の要請があった。為政者たるもの「不違農事」を厳守するのが

鉄則ではあるまいか。

（二）夜も更けた。犬の遠吠え、雑木を吹き抜ける風の音以外は、物音もない夜の静寂を破って、渡し場あたりが喧しくなった。税を送って還って来る人たちだ。

（三）史書を読んでいて専権横暴を極めた魯国の陽虎の話が出て来た時、この国にも似たような輩が居ることに思い至った。孤り胸に抱く煩悶を誰に向かって告げたらよかろうか。（当時福山藩吏として悪名高かった家老を諷喩）

（四）悪吏横行の時勢を嘆き悪政を愁う。昔からの歴史の潮流の乱れは 今もって止まらない。我が身は何を為す術もなく、流れに身を任せている。

（五）樹の根っこに坐って、白髪頭の親爺が心の内を話している。「この頃国境は 特に変わったことが有るわけではないのに、政令は 次から次へと 沢山出される」と安定しない政治を嘆く。

（六）隠遁したような自分は、何をしようという意欲もない。無用の人間は 時勢に置いてきぼりにされるだけ。国を安んずる術とて持たない私は、隠者になるしかないのか。

⑤「偶作」二首

（一）農家にとって一年中で一番忙しい取り入れの時期に、労役に駆り出すとは暴政も甚だしいという憤り。

（二）城中での仕事をすませた家老は、藩中の事柄の諸々について、一々伺いをたてる為に、新参者の猾吏の家に赴かねばならないことへの憤り。

⑧「時情」

京都は天子の支配する都で有るはずなのに、武家の権威は百年経った今もなお続いている。自分の考えとは違う現今の世の情勢を慨嘆する。

ただ慨嘆するばかりで自分には何もできないでいる、その苛立ちを詠ったのが京都遊学の最後に詠まれた「歳杪放歌」である。

「歳杪放歌」歳の杪の放歌

三十二年 胡ぞ忿忿たる
單身 千里 六たび東に向かふ
満腔の慷慨 底事をか成す
負郭の田園 半は空と爲る」
唯だ風月の 多病に供する有り
今年も又 盡く 伏枕の中
屠龍の無用なるは 已に之を知る
一寒 此の如きも 我に於ては宜なり」
喜ぶに堪えたり 阿連の麤くも字を識るを
尊前に唱和す 歳を餞るの詩」

三十二年胡忿忿、單身千里六向東。
満腔慷慨成底事、負郭田園半爲空。」
唯有風月供多病、今年又盡伏枕中。
屠龍無用已知之、一寒如此於我宜。」
堪喜阿連麤識字、尊前唱和餞歳詩。

［忿忿］慌ただしいさま。［満腔慷慨］身体いっぱいの慨嘆。「腔」は、身体。［負郭田園］城壁に近い良田。［屠龍無用］龍を屠る術を習得したが、龍はいないので役には立たない。［一寒如此］このような貧乏も。［阿連］ここでは弟（信卿）のこと。［尊］樽に同じ。

三十二年の間 何と慌だしかったことか、千里の道を身ひとつで六度も東に向かったのだ。身に溢れる憤懣と慨嘆を抱きながら お前はいったい何をやり遂げたのか、郷里の田畑も 半は自分のものではなくなった。」唯だ多病のうちに日々が過ぎて、今年も又 枕に伏したまま暮れた。「屠龍の学」が役に立たないことは 已にわかっている、貧しさが身に染みるのは情けない私には当然のことだ。ただ嬉しいことは 弟が何とか文字を覚えたこと、酒樽を前に唱和するのは歳を餞るの詩。」

この衰えた世を何とかしたいと、この十四年の間に六度も京都に出て、田畑を売ってまで学問を続けてきたのに。「身に溢れる慷慨の思い」（幕政、藩政への憤懣）も空しく、何もできないでいる自分が情けなく、年の暮れに酷く落ち込んでいる。

茶山の京都遊学の目的は、初めは医学と古文辞学を学ぶためであったが、途中から朱子学に変更。また各地から集まってきた学者、文人との交流を通して、知識を広め見識を深めることも目的の一つであった。

六度目の京都遊学を終えたとき、茶山は今後の身の振り方を考えたが、なかなか決まらなかったようだ。茶山は当時の、世に名を揚げて出世するための学問に疑問を抱いており、世のため人のための学問を更に続けるか、それとも神辺に落ち着いて親孝行をし、塾を開いて「学問の種を蒔く」仕事をするか、岐路に立たされていたが、結局、悩んだ末に後者に決めた。

二　神辺定住後に於ける政治批判詩

茶山が六度目の京都遊学を終えて神辺に帰ったのは三十三歳の夏、すなわち安永九年（一七八〇）であるが、折りしもその頃は老中田沼意次の全盛期であった。田沼意次は安永元年（一七七二）に老中となって側用人役も兼ね、その権勢を恣にした。しかし天明の飢饉、それに続く百姓一揆もあって田沼政治に対する世の批判は厳しくなるばかりであった。

その後、天明四年（一七八四。天明は一七八一～一七八八）に若年寄であった長子の意知が江戸城中で刺されて死亡したことで意次の権力は急速に衰え、六年（一七八六）八月に失脚。七年（一七八七）六月に松平定信が老中首座となる。定信の「寛政の改革」が始まった寛政初年の頃（寛政は一七八九～一八〇〇）に、田沼氏の悪政を批判する西山拙齋[1]の『休否録』、姫井仲明の『苞桑録』、冢村子徳の『剥復録』などが編まれている。

このうち拙齋の『休否録』には、序である「休否録引」の後に、「同志勧懲の資」として釋慈周、菅晉帥（茶

山)、姫井元喆、釋熙道、賴惟寛、賴惟柔、菅谷長昌、中井積徳、荒木喬ら九人の田政批判の詩を附し、その後に拙齋の政治批判詩を続けている。長引く悪政に、学者、文人たちも我慢できなくなって書きためていた作を拙齋が纏めたもので、勿論 出版したわけではなく仲間内で流通させていたものであろう。

茶山もその同志として、かなり厳しい内容の批判詩を作っている。『休否錄』には次の十七篇三十五首が引かれている。

①古齊謳行　②歎晉　③歎齊　④西城二首　⑤古意
⑥元旦試筆　⑦無題二首　⑧又（無題）⑨窮隣
⑩春興六首　⑪詠史六首　⑫後詠史六首　⑬郢都篇
⑭即事　⑮丁屋路上　⑯題畫虎　⑰遙和中井竹山韻

以下、例を挙げてその内容を見ていくことにする。（詩題の上の番号は『休否錄』の作品番号とする。）

① 古齊謳行

君 見ずや 臨淄の繁華 世に無き所
諸侯の邸舘 幾千區
魯・衛は南に在り 宋・鄭は北
家家 金屋 緑珠を貯ふ」
王孫 公子 日に遊嬉し
出でては 則ち獵園 入りては妓園
自ら言ふ 昇平なれば 世々茅土あり
今にして 樂しまずんば 人の嗤ひと為らんと」
又 見ずや 竪刁の威勢 匹儔少なく
七輿の車服と 新たに侯を拝せらる
去年 采地に 城郭を築き
金碧を門と為し 玉を樓と為す」
又見ずや 侯家各々 一新官を置き
専ら就人を 掌りて 容顔を窺はしめ
苞苴 白日 豊美を争ひ
権門 黄金 丘山と聳ゆ」
嗚呼 侯と為り 伯と為り 君已に足る
綵色 便嬖 更に何をか欲する
猶ほ聞く 前村 租期を後らせ
白頭の吏 將に獄に下されんとすと」
君不見臨淄繁華世所無、諸侯邸舘幾千區。
魯衛在南宋鄭北、家家金屋貯緑珠。」
王孫公子日遊嬉、出則獵園入妓園。
自言昇平世茅土、今而不樂為人嗤。」
又不見竪刁威勢少匹儔、七輿車服新拝侯。
去年采地築城郭、金碧為門玉為樓。」
又不見侯家各置一新官、専掌就人窺容顔。
苞苴白日爭豊美、権門黄金聳丘山。」
嗚呼為侯為伯君已足、綵色便嬖更何欲。
猶聞前村後租期、白頭之吏將下獄。」

［臨淄］齊の都。［緑珠］晋の石崇に愛された女。笛の名手。石崇が孫秀に捕らえられた時、楼上から投身自殺をした。［妓園］唐の申王が冬寒に多くの妓女を座側に侍らせて牆とし寒

気を防ぎこれを妓園と称した。[王孫公子] 貴族の子弟。[茅土] 領地。封土。昔、天子が諸侯を封ずる時、五行説によりその領地の方角に当たる色の土を白茅（穂の白い茅）に包んで授けたから。[竪刁] 宮中のずる賢い小役人。人を賤しめて言う語。「刁」ずる賢い。[車服] 車と軍服と。功によって賜る物。転じて官爵、地位、身分。[采地] 采邑。卿・大夫の領地。[金碧] 金色と青色と。美しい色。[綵色] 五色が備わっている彩り、[便嬖] へつらい媚びる。お気に入りの人。

あなた 見ていませんか 齊の都の繁華なことは この世にはないほどだと、諸大名の屋敷は 幾千区もある。魯・衛は南に在り 宋・鄭は北に在り（江戸の藩邸を指す）、家屋という家屋は 金の屋根で 美女を貯えている。」貴族の子弟が 毎日遊び楽しみ、外に出れば 猟場での狩り、内に入れば妓女との戯れ。自ら云う 世は穏やかに治まって 代々授かった領土は安定している、今 楽しまなければ人の嗤い者となると。」又 見ていませんか 小役人が威勢を張り 限られた仲間が権力を握り、沢山の輿や車服と 新たに侯を下された。（田沼意次は）去年 領地に城郭を築き、金や碧を門とし 玉の楼としたのを。」又 見ていませんか 大名は 各々 新しい官職を置き、専ら人を雇って 人事権を 掌り 田沼意次の 顔色を窺わせているのを。賄賂は昼間でも 豊美を競い、権門は 黄金が 丘山のように聳えているのを。」

ああ 侯爵となり伯爵となり 君 已に十分ではないか、十分に足りているのに 更に何を欲するのか。 猶お 聞くことに 前の村では 租税の納期を遅らせた為に、白髪頭の官吏が 将に獄に下されようとしていると。」

田沼親子の栄達と悪政を詠った詩である。

②「歎晉」 晉を歎ず

晉侯は今春 大廟に格り
十五邦君 命に應じて從ふ
輿衛 各の疆内の富を 耀かせ
一一 行装 麗容を 逞しくす」
璽琫 鮫函 玉の轆轤
鏤膺 鋈續 錦は模糊たり
馬聲 迴かに合す 千里の野
人肩 相摩す 九軌の途」
廟は公宮を距つること三日の 程
食を都城に傳へ 復た驛亭に
前驅 將に寢園の中に入らんとするに
後騎は纔かに國の東門を發す」
隣叟 近日 絳從り至り
我に過ぎりて 屢ば誇る 全盛の事
君 見ずや、滕・薛の貧民は 家計に拙にして
富歳なるに人を賣りて新税を償ふを」

晉侯今春格大廟、十五邦君應命從
輿衛各耀疆内富、一一行装逞麗容」
璽琫鮫函玉轆轤、鏤膺鋈續錦模糊
馬聲迴合千里野、人肩相摩九軌途」
廟距公宮三日程、傳食都城復驛亭

前驅將入寢園中、後騎纔發國東門」
隣叟近日從絳至、過我屢誇全盛事。
君不見、滕薛貧民拙家計、富歳賣人償新税。」

［大廟］日光東照宮を指すのであろう。［璽琫鮫函玉轆轤、鏤膺鎏續錦模糊］「璽琫」は、諸侯の帯びる刀の鞘の黄金の飾り。「玉轆轤」は、玉で飾った車。「鏤膺」は、飾りを彫り込んだ馬の胸当て。「鎏續」は、白銀で飾った馬の胸がいの環。「錦模糊」は、馬の背に掛けている錦が目に眩しいこと。［寢園］墓地。［絳］春秋時代、晉の都。ここでは江戸。［滕薛］春秋時代の小国。ここでは諸藩のこと。

晉國の王は此の春 先祖の廟に参拝し、十五の諸侯が命に応じてそれに従った。その行列は領内の富を耀かせ、衣裳はそれぞれ美しさを極めている。」黄金の鞘飾り鮫皮の太刀に 玉の車輪、彫り刻んだ馬の胸当に 胸がいの環は銀 馬に着せた錦が目に眩しい。馬の嘶きは千里の野の果てにまで届き、従者は肩をすり合わせながら大通りを行く。」大廟はお城から三日の程、食事は都城に復た 駅亭に送られる。前駆が墓園の中に入ろうとする頃、後続の騎馬は やっと国の東門を出発する始末。」隣りの爺さんが先日、都の絳からやってきて、私の所へ 寄ってその素晴らしさを誇った。」しかし皆さん 知っていますか。滕や薛の貧民は家計が成り立たず、豊作の歳にもかかわらず家人を売って新税を納めていることを。」

「晉侯」とは、春秋時代、晉の殿様であるが、ここは時の将軍を指す。その日光東照宮参拝のお供を命じられた十五諸侯の行列の豪勢さを述べているが、その費用は全てそれぞれの領民から搾り取ったもの。そのため諸藩の「貧民」は「富歳」にもかかわらず「人を賣」って「新税」を払わなければならない状態だという。福山藩主の阿部正倫も参拝の供を命じられ、その費用を捻出するために「新税」を取り立てているようであるから、此の詩は藩主批判の詩とも言えよう。

④「西城」二首

「其の一」の内容

西城で退庁の合図の太鼓が響いた。佐野政言は待ち構えて田沼意知を搏った。城中では田沼親子が、役人を叱咤し怒鳴り散らして恣に権力を振るっていた。帰り道 意知を乗せた輦車からは刀傷からの血が街路に迸り落ちた。公庁では誰もその訳を問い正す者はいない。

（其の二）

王侯 爭ひて挽く 廣柳車
瓦礫 柩を打ち 人は喧嘩す
祇林 新瘞 聶政の尸
士女百郡 來りて 花を供ふ」
空しく積む 官を賣りての鬻獄金
奪ひ難し 臍を燃やし 肉を啖ふの心
刀 既に折れ 衆情の據るを笑ふ
氷山 未だ消えず 竟に 何如せん」

王侯爭挽廣柳車、瓦礫打柩人喧嘩。
祇林新瘞聶政尸、士女百郡來供花。
空積賣官鬻獄金、難奪燃臍啖肉心。
笑力既折衆情攄、氷山未消竟何如。」

［柳車］葬式に用いる車。［祇林］祇陀太子の園林。転じて寺をいう。祇林寺。［新瘞］新しい墓。［聶政］戦国時代韓の刺客。厳遂のために大臣の俠累を殺して自殺した。ここは佐野政言を指す。［空積賣官鬻獄金］今までは官職を金で売ったり、罪に陥れては金で罪を減刑したりして金を貯えていたが、今となっては空しいことだ。「鬻獄金」は、罪人から金を取って罪を軽減すること。［燃臍］然臍。臍を焼くこと。後漢の董卓が誅せられて尸を市にさらされた時、その体が肥満して脂が多かったので、番人がその臍に火を置いたところ、数日間燃え続けたという故事。［攄］散らす。散る。［氷山未消］悪政は完全に治まったわけではない。氷山の一角の意知が殺されただけで、親の意次はまだ残っている。

王侯たちは 争って意知の葬儀の車を挽く、瓦や石ころで柩を撲ち 人々はやかましく騒ぐ。寺の新しい墓に埋められた聶政（佐野政言）の屍に、男や女があちこちからやって来て花を供える。」官を売り鬻獄金を貯えたり空しいことをしたものだ、（人々が）臍を燃やし 肉を啖わせるほど（意知をきらっていた）の心を奪うことは難しい。表面は柔和を装い、内心は陰賊褊忌であった意知も既に殺され人々の心は攄った。しかし悪政はまだ治まったわけではない。さてこれからどうしたものか。」

田沼意知を誅殺した義士を称え、意知の悪政の跡は後世にわたって消えないことを述べる詩。

⑦「無題」二首

「其の一」の内容

悪政に耐えかねた農民が、各郷から集まって来て一揆を起こし、悪役人の家を毀し食べ物を奪い大騒動。追い詰められた鼠が猫を懼れないように、この烏合の衆が億兆の山犬や虎に化すことを私（茶山）は恐れる。

（其の二）

寧ろ亂民と作るよりも偸兒と爲るを欲せず
寧ろ矢石に斃るるよりも鞭笞に死するを欲せず」
既に瓦や木を賣り 又た麥の苗まで
一家 數口 將に何にか逃れんとする
桃は紅に 柳は翠 社翁の雨
雨を冒し寒を衝きて 人は繹騒ぐ」
去年は千たび請ふも 一唯も無く
麥を賜ふも 僅か半日の飢ゑを支ふるのみ
積れる怒りは霽れず 天も亦た病み
愁雲 一月 夜は凄其たり」
酒を奪ひ 食を攫ひて 閭巷は 喧しく
屋を毀し 廬を壞し 誰の怨みをか報ずる
渠首は固り 三族を夷さるるを知るも
號哭して 唯だ 九閽に達するを希ふのみ」
牙兵 出で戍る 里正の宅

猶ほ嗔る　盆盂に　鶏豚の少きを。
寧作亂民不欲爲偸兒、寧斃矢石不欲死鞭笞。」
既賣瓦木又麥苗、一家數口將何逃。
桃紅柳翠社翁雨、冒雨衝寒人繹騒。」
去年千請無一唯、賜麥僅支半日飢。
積怒不霽天亦病、愁雲二月夜凄其。」
奪酒攫食閭巷喧、毀屋壞廬報誰怨。
渠首固知夷三族、號哭唯希達九閽。」
牙兵出戍里正宅、猶嗔盆盂少鶏豚。」
［偸兒］且く生を偸むようにして生きている者。［死鞭笞］租税を滞納して鞭打たれて死ぬこと。［社翁雨］「社翁」は、土地の神様。立春の後の春祭りに降る恵みの雨。農作業が始まる時期。［繹騒］騒ぎが続くこと。［凄其］寒さなどが身にこたえること。［九閽］天のこと。「閽」は、宮殿の門。

一揆の乱民となろうとも　びくびくと生を盗むようにして生きたくはない。矢玉に斃れようとも租税を滞納して鞭打たれて死にたくはない。」既に瓦や木材を売り　更に麦の苗まで、これでは一家数口　何処へ逃げたらよいのか。桃は紅に柳は翠　氏神様の恵みの雨が降るというのに。雨を冒し寒さを衝いて　人は騒ぎを続けている。」去年は千度の請願に　お上は一度も耳を傾けることなく、麦が配られたが僅か半日の飢を支えただけ。積もる怒りは霽れることなく　天も亦た病んで、愁いの雲は二月も続いて　夜は寒さが身にしみる。」酒を奪ひ食を攫って町なかは喧しく、家屋を毀し廬舎を壊して誰の怨みを報いんとするのか。一揆の頭は　罪は三族にまで及ぶことを当然のこと知ってはいるが、号哭の聲が天に達することを唯だ願っているのだ。」兵を出して守りを固める役人の宅では、なおも盆の届け物に鶏豚が少ないのを嗔っている。」

飢饉の歳にもかかわらず、お上の救済は雀の涙。しかし租税だけは取り立てる、そのために各地で米商人、富家に對する「毀屋、壊廬」が起きた。首謀者は「三族」に及ぶ厳罰を覚悟しての行動であり、それは実情が「九閽」まで届くことを願ってのものであった。にもかかわらず「里正」は「盆盂」に「鶏豚」の届け物が無いと嗔っている。茶山は幕府の飢饉対策を批判し、かえって富家、米商を襲う首謀者の行動を擁護。民の危難をよそに、届け物が粗末だと腹を立てている役人の存在を指摘している。

以上取りあげた①・②・④・⑦の詩は、「草稿」にはあるが、「刊本」には収められていない。「草稿」は茶山が板本『黄葉夕陽村舎詩』を刊行するために準備していたもので、現在広島県立歴史博物館に所蔵されている。その「草稿」にはあるが『休否録』にも載せられていない詩に次の「人事」がある。

人事

人事紛紜乱似絲　人事　紛紜　乱れて　絲に似たり
朝昏世態暗遷移　朝昏　世態　暗に遷移す
邱樊閑適英雄老　邱樊　閑適　英雄老い

藩鎮徴求鷹犬滋　藩鎮　鷹犬を徴求すること滋し
九鼎何関周社稷　九鼎　何ぞ関せん　周の社稷
八厨偏管漢安危　八厨　偏に管る　漢の安危
狂愚自信平生志　狂愚　自ら信ず　平生の志
秪有腰間匕首知　秪　腰間の　匕首のみ　知る有り

［徴求］お上に取りあげる。［鷹犬］鷹と犬と共に猟に使うもの。手先に使って人を押しのけさせるもの。［九鼎］禹の時、九州の金を貢せしめて鋳た鼎で夏・殷・周の三代を通じて伝わった天子の宝。［社稷］五穀の神。［八厨］貨財を以て能く人を救った八人。後漢の度尚・張邈・王考（孝）・劉儒・胡母班・秦周・蕃嚮・王章（商）。一に劉儒を劉翊に作る。［偏管］「管」司る。拘束する。［匕首］『史記』「呉太白世家」に「専諸をして匕首を炙魚の中に置き、以て食を進めしむ。匕首を手にして王僚を刺す」とある。

人の世のことは ごたごたと乱れて 縺れた糸のようだ。朝に晩に世の中の様子は 知らぬ間に遷り変わって行く。丘やまがきの中で 閑居を楽しむ英雄は年老いてしまい、守護の諸侯は 鷹や犬の様な連中を取り挙げる事屡々だ。国家の象徴の重宝は 周の社稷を守ってはいない。八厨は専ら漢の存亡に関わった（財貨や宝より人の心だ）。狂愚でも 平生から抱く自分の志は自らが信じている。（その志は）ただ 腰に付けた匕首だけが知っている。

この詩の尾聯は「いざという時は腰に着けた匕首で刺す覚悟だ」と言うほどの堅い志を自分は持っているといった、危険な内容なので「草稿」にはあるが「板本」にも、さすがの「休否録」にも載せなかったと思われる。

その他の作の内容は次の通り。

③「歎齊」田沼意次の長子意知を誅殺した義士を称える。
⑤「古意」田沼父子が飢餓に苦しむ民を顧みず、贅沢な暮らしをしていることを詠う。
⑥「元旦試筆」田沼父子の悪政に對して上帝は妖孽を下して戒められたが、誰もそれに気付かない。
⑦「無題」二首（其の一）遂に百姓一揆が起きたが、政府は民の飢寒を救おうとはせず、武力による鎮圧を行った。この度は何とかできても、豺虎と化した民を抑えられるか。
⑧「又」（無題）「一朝の費」を以て「十家の顔」を喜ばせることが高官たちには何故できないのか。
⑨「窮隣」饑饉に苦しんでいる人たちの為に何とか役に立ちたいと思うが、どうすることもできない自分が情けない。
⑩「春興」六首　田沼政治の弊害と、それが終わって寛政の改革の兆しがようやく見えてきたこと。
⑪「詠史」六首　田沼氏による悪政の実態と、その失脚によって全てに寛大な新政がようやく始まったこと。
⑫「後詠史」六首　何の役にも立たない「宰相」の批判と、やっと兆しをみせ始めた善政への喜びを詠う。
⑬「郢都篇」悪政のために世の中は亂れてしまったが、ようやく世を救う宰相が現れてきたようだ。

⑭「即事」善政が始まったお陰で、身を潜めていた私もやっと本来の仕事ができるようになった。
⑮「丁屋路上」田沼政治が終焉を迎えて寛政の改革が始まり、盗賊などの出没も聞かなくなった。
⑯「題畫虎」あれほど猛威を振った虎も、今では遠くに逃げてゆき、人々は安眠できるようになった。願わくは今後、穴から出てこぬように。
⑰「遙和中井竹山韻」黒頭（松平定信）が新しい宰相になり、最初に農政を学者に尋ねようとした事を喜ばしく思う。

拙齋『休否錄』所収の茶山の詩は、善政を期待する⑭「即事」、⑮「丁屋路上」などを除き、いずれも民の実情を直視しようとしない幕政、民の生活に直接関わっている役人についての厳しい批判であり、またようやく始まった寛政の新政への期待であった。それらは京都遊学期の批判詩に比べて、批判の対象が絞られており、民を苦しめている悪政の内容が具体的に描かれていて、一段と厳しさを増している。

ところがこれらの作品のほとんどは『黄葉夕陽村舍詩』前篇の板本には収められていない。その理由は茶山が弟子の頼山陽の意見を容れて「幕府の忌諱」に触れそうな政治批判詩を省いたことによる[2]。

『休否錄』所収の政治批判の詩についての、「草稿」と「刊本」の採否状況、及びそれに附された山陽の評を示すと次のようである。

	（『休否錄』）	（草稿）	（板本）
1「古齊謳行」	○	○	×
・山陽の評―「諱に触れんことを恐るるも、抑も事は已に逝けり。妨げざるか」			
2「歎晉」	○	○	×
・山陽の評―「恐らくは忌を干さん」			
3「歎齊」	○	○	×
・山陽の評―「諱に触れん」			
4「西城」	○	○	×
・山陽の評―「假に西土を立つるも、當に□詩禍を賈ふべし」			
5「古意」	○	○	×
6「元旦試筆」	○	○	×
7「無題二首」	○	○	×
8「又」	○	○	×
9「窮隣」	○	○	○
10「春興六首」	○	○	×
11「詠史六首」	○	○	×
12「後詠史六首」	○	○	×
13「郢都篇」	○	○	×
14「即事」	○	○	○
15「丁屋路上」	○	○	○
16「題畫虎」	○	○	×
17「遙和中井竹山韻」	○	×	×

「草稿」は『休否錄』所収の十七篇の内、17「遙和中井

竹山韻」を除いて他は全て採り入れているが、「板本」では「幕府の忌諱」に触れないであろう三篇だけを残して其の他は省いている。山陽の評語の付されていない作も、その意を酌んで茶山が削除したものと考えられる。

（17「遙和中井竹山韻」は『休否錄』に見えるだけで「草稿」・「板本」どちらにも載せられていない。もしかしたら「中井竹山」の方から『休否錄』に収めたかと考えられる。）

なお『休否錄』に収められていない茶山の政治批判詩で、山陽の評語が付いているものに次の作がある。

1「雜詩二首」（巻一）　○　×
・山陽の評―「恐らくは忌諱に触れん」

2「偶作二首」（巻一）　○　○
・山陽の評―「恐らくは忌を干さん。抑も妨げざるか」

3「人事」（巻二）　○　×
・山陽の評―「恐らくは忌を干さん」

ここで『黄葉夕陽村舍詩』前篇が文化九（一八一二）年、茶山六十五歳の時に刊行されるまでの経過を整理しておこう。刊行された『黄葉夕陽村舍詩』前篇[3]には、茶山が出版のために整理した「草稿」（廣島縣立歴史博物館蔵）がある。出版の話が具体化したのは文化七（一八一〇）年であるが、茶山は念のために「草稿」に収めた作品の内容について賴山陽に点検を依頼している。その経緯については、山陽の『黄葉夕陽村舍詩文』遺稿の序に次のように記されている。

既に壯にして其の延引を蒙り、其の塾の講論を督するに從ふ。會ま其の詩を刊するを請ふ者有り、余に屬して校理せしむ。乃ち盡く其の筐篋を發きて、始めて之を縱觀するを得たり。～余は其の意を領して、妄に抉擇を爲す。～此の如くすること周歲、既にして余は京に入る。刻の成りて寄せ示さるるに、則ち盡く余の選ぶ所に從ひ、併せて如（六如）師及び余の評語を雕す。余は之が爲に悚慙するも、而も翁は遂に余を以て「與に語る可き者」と爲すなり。

［與に語る可き者］『論語』學而篇の孔子の言葉を踏まえている。孔子と子貢の『詩』についての会話の中で、孔子が子貢を誉めて「始可與言詩已矣」（始めて與に詩を言う可きなり）と言った。

山陽は三十歳の時に廉塾に來て、都講として一年余り滯在したが、その間に茶山は「前篇」の「草稿」を山陽に渡し、所収作品の「選」と「評」を依頼したのだという。「草稿」には既に僧六如の評が記されていたが、山陽は茶山に請われるままに作業を進めた。やがて文化九（一八一二）年に「前篇」は出版され、既に京都に出ていた山陽の許に届けられたが、山陽の「選」と「評」は茶山によって全てそのまま採用されていたという。

山陽が師茶山の作品を評するということは、さすがの山陽も気になったのであろう、「草稿」巻一の冒頭には、

黄吻　乳臭、敢えて一辭を贊するは、愛に狃れ吾を忘るればなり。其の罪　云何せん。亦た唯だ疑ひを質

し益を求むるのみ。幸はくは末減に従はんことを。頼襄 謹んで識す。（「末減」罪を軽くするという意味。ここの罪とは、弟子でありながら師の詩を批評し添削すること。）

という書き込みがある。茶山は山陽が「幕府の忌諱」に触れる虞れがあると指摘した作品の全てを省いている。

これら幕府の「忌諱に触れ」そうな茶山の政治批判詩が作られたのは何時ごろのことなのか。拙齋の「休否録引」の内容から考えて、おそらく天明（一七八一～一七八八）の中頃から寛政（一七八九～一八〇〇）二年頃まで、即ち田沼父子の全盛期が過ぎて落ち目になり、松平定信が登場して寛政の改革が行われるようになった頃までに詠まれたものと推測される。その期間は茶山が神辺に落ち着いてから十年余りの間であり、従って茶山は帰郷後の十年ばかりは、それまでと同じような政治批判詩を作っていたことになる。

それらの作は西山拙齋、頼春水ら、仲間うちで遣り取りされている分には問題はなかったようだが、それを出版して世に出すとなると事は別であった。田沼政治は既に三十年余り前の出来事ではあったが、幕府の「忌諱に触れない」とも限らないので用心するに越したことはない。茶山は草稿に記された山陽の指摘を見て、幕府の「忌諱に触れ」そうな詩を省くとともに、「忌諱に触れ」そうな表現についても、できるだけ穏やかなものに変更している。このようなことに疎かった茶山は、山陽に指摘されて始めて気がついたようだ。なお語句の改変については、茶山詩研究の資料として山陽の評語と併せて今後整理しておく必要があろう。

三 政治批判詩から農村詩へ

安永九年（一七八〇、三十三歳）に遊学を終えて郷里の神辺に帰った茶山は、翌年の天明元年（一七八一、三十四歳）に塾を開いて、郷土や近隣の子どもたちの教育に関わってゆく。当座十年余りは政治批判の詩を作り続けていたようであるが、その数は漸次少なくなり、具体的な政治批判詩は作らなくなっている。その理由は、幕府の政治が「寛政の改革」によって一応は落ち着いてきたことが一つの理由として挙げられるであろうが、郷里の神辺に腰を落ち着けることになると藩政は勿論のこと、幕政批判はしにくくなったことが主な理由であったと考えられる。

藩内に幕政批判をする者が居れば、藩の責任となって藩主に迷惑をかけることは必定であるし、塾の経営も危うくなる。もし茶山が此の時期、塾を藩に移管すること（塾の移管は寛政八年、四十九歳）を已に考えていたとしたら、藩への対応は益々慎重でなければならなかった。

茶山の政治批判の態度に変りはなかったが、その表現の方法は藩との関係を考えて変更せざるを得なかったようだ。茶山の其の後の藩との関わりを見るに、仕官はしないで付かず離れずに関わりを保っている。藩に仕えてしまうと藩のことを第一に考えて動かざるを得なくな

る。彼は農民の側に立って藩との仲を取り持ち、実質的に農民の利益を計ろうと考えていたようで、その為にも藩との関係は、仕えないまでも良好に保っておきたかった。そのようなわけで彼の政治批判は、農村とそこに生きる農民の生活を詠う詩を通して表現されることになる。そういった詩の例を数首挙げてみる。

①「偶作」（「後編」巻二）

城隍　前月　頻りに雨を祈り
野に観る　今朝は更に晴を祷るを」
本自り農家に暇日無し
又　聞く村吏　撞の征を索むるを」

城隍前月頻祈雨、野観今朝更祷晴。
本自農家無暇日、又聞村吏索撞征。

［城隍］土地神の社。鎮守の社。［撞征］綿の税。

鎮守の社では前月　頻りに雨を祈り、今朝は野で　更に晴を祷るのが見える。」もとより農家には暇な日は無く、村吏が又た綿の税を取り立てにくるという話だ。」

―先月は鎮守の社で雨乞いをし、今朝は野に出て晴を祈っている。農家では年中　暇なしに働いているのに、村役人が又た綿の税を取りに来るという話だ。

②「江良路上」江良への路上　（「後編」巻七）

千處の耘歌　四野の風
夫須は棋點のごとく　一叢叢」
時　清くして城市は　皆　絲と管
誰か信ぜん　歓聲　此の中より出づるを」

千處耘歌四野風、夫須棋點一叢叢。
時清城市皆絲管、誰信歓聲出此中。

風にのって　あちこちから農作業の歌、菅笠が碁石のように　一叢一叢。」世は穏やかで　城市ではどこも管弦の音、歓樂の歌聲はここから出ていると　誰が思っていようか。

―あちこちの畑から聞こえる農作業の歌。城下の賑わいはみなこれら農民の労苦のお陰なのに。

③「夏日雜詩」十二首（六）（「後編」巻八）

村翁　水を擔ひ　崖を踏みて登る
稗を種ゑて田は高く　山の半層」
自ら道う　移り來りて　久しき旱を經るも
三回　灌ぐこと　遍くすれば　例ね能く升ると」

村翁擔水踏崖登、種稗田高山半層。
自道移來經久旱、三回灌遍例能升。

村の爺さんが水を擔い　崖を踏みしめて登る。稗を種えた田は高く　山の中腹にある。」自ら道う「ここに移ってから長い旱があったが、三回　万遍なく水をやれば　例ね能く稔るよ」と。」

―村の爺さんの稗作りの談話。苦労を苦労ともせず、農事に精を出している姿を詠う。

④「夏日雜詩」十二首（八）（「後編」巻八）

旱田　水を爭ひて　四郊　喧し
處處に松明ありて　路　昏からず」

村婦 夜深く 來りて勞を慰め
左に孩乳を懐き 右に盤飧」

旱田爭水四郊喧、處處松明路不昏。」
村婦夜深來慰勞、左懐孩乳右盤飧。」

旱続きで水を争い どこも騒がしい。路のあちこちに松明があり 路は暗くない。」村婦が この夜更けに慰労にやってくる、左手に乳飲み子を抱き右手には弁当をさげて。」

—旱で水争いが起きて騒がしく、夜も水の見張り。女房どのも、乳飲み子を抱えて弁当運び。

⑤「江村秋事」(「遺稿」巻四)

柳葉 風無きに 露を帶びて飛び
江を隔てて村落 晩れて依微たり」
扁舟 稲を載すは 誰が家の婦ぞ
孩兒を襁負ひて 自ら棹さして歸る」
柳葉無風帶露飛、隔江村落晩依微。」
扁舟載稲誰家婦、襁負孩兒自棹歸。」

柳の葉が風も無いのに 露を帶びて散り、川向こうの村は 日暮れに霞んで見える。」小舟に稲を載せて行くのは どこの家の婦か、乳飲み子を背負い 自ら棹さして歸ってゆく。」

—夕靄の中、刈り取った稲束を載せて歸って行く小舟。よく見ると棹を握っている のは乳飲み子を背負った農婦。村では皆忙しく働いている。

これらの詩には、一生懸命に働く農夫の姿が詠われている。並大抵ではない仕事に、懸命に健気に取り組んでいる農夫の姿である。同じ農民としての立場から、茶山にはその大変さが身に染みて分かる。だから、茶山は、農民の側に立って藩との仲を取り持ち、実質的に農民の利益を計ろうと考えていたように思われるが、実際に農民の為にどのようなことをしたのか。山陽の「茶山先生行状」(『黄葉夕陽村舎文』巻四)には、飢饉や一揆に際しての茶山の働きの例が次のように記されている。

邑民 嘗て饑荒を以て、聚りて事を擧げんと謀る。先生は夙に其の機を察し、一有力者に就きて、禍福を諭さしめ、事 寝むを得たり。邑 健訟(訴訟好き)を習とするも、亦た先生に因りて、沮止する者多し。而れども先生の口より、未だ嘗て之を言はざるなり。

また、廉塾を藩の管轄にしてほしいことを上願した「郷塾取立に関する書簡」の草稿(寛政八年 一七九六。四十九歳。『広島県史』近世資料編Ⅵ)には、饑饉の際に二十年間に亘って行ってきた貧民救済の行為について自ら次のように述べる。

二十年間、社倉かたちのこと思ひつき候ひて麥少々出し、人にもいたさせ蓄へて三四十石にもなり候。折悪しく凶年にて直に分與いたし候。かくの如きこと三度、一度は米なり。今年もまたいたしかけ候。さてその分與いたする時は、一度は粥にいたしたることもあり、いづれとも朝へ願出候例なり。いつもわたくし首倡

なれども皆 庄屋おもひつきにいたさせ候ひて、わたくしどもことは隣人も知り申さざる位にて候。これらもまた名聞すきとも人に思はれず候一端なり。

「二十年間」といえば、京都遊学の後半もその中に入るので、神辺に帰っている時には飢民救済の活動を続けていたことになる。茶山がこのような事を言うのは、このたび自分が藩に郷塾取り立てを願うのは世に名を揚げんためではないことを説明するためで、自分の善行を誇ろうとしてでは勿論なかった。

茶山の詩には、飢民救済に触れた律詩「9窮隣」（「前編」巻三）があり、その起聯と尾聯に次のようにある。

擬頒斗米賑窮隣　斗米を頒ちて窮隣を賑わさんと擬し
自笑山厨未太貧　自ら笑う 山厨 未だ太だしくは貧ならざるを

少しばかり米を窮隣に分けてあげようかという気になって、我が家の台所もこれでまだそれほど貧しくはないのだなと自笑する。

慚我救荒無異術　慚づらくは我 荒を救ふに異術の無きを
半生辜負読書身　半生 辜負す 読書の身

この窮状を救う方策を持ち合わせていない自分が慚かしい、これまでの半生 何のために書物を読んできたのか。飢民救済に関わりのある詩がまだ存在していると思われるので、このことについては今後の課題としておく。

茶山は、京都遊学の半ばに古文辞学から朱子学に変わった。その頃（安永元年、一七七二。二十五歳）から、政治批判の詩を詠むようになったと考えられる。「我が国は天子を上に頂いて、朝廷を中心とした政治が行われるべきである」とする尊皇主義の茶山は、朝廷が無視され横暴な為政者が私腹を肥やし、賄賂が横行する幕府の政治に対して憤慨を禁じ得なかった。しかし、初めの頃の作は為政者を「鳥」に擬したり、石に語りかけたり、「不識自誰家」（「偶作」二首、前巻一）とぼかした表現をしたり、婉曲な言い方にしたりして、核心を衝いた感じの詩ではなかった。

安永九年（一七八〇）三十三歳で最後の遊学を終えて神辺に帰った茶山は、塾を経営して郷土に定住した。ちょうどその頃、つまり天明二年（一七八二）春から夏にかけて全国的に長雨が続き、冷害で作物が実らず、翌天明三年には、多数の死者が出るほどの大洪水と冷害に見舞われ、以後ざっと七年間は全国的に水害・冷害・虫害・旱魃等の災害が続いた。食べる物が無くて餓死する者が多く、道端には行き倒れの死骸が数知れず転がっていた。これらの天災は人の力では如何とも為し難いが、飢饉に対する措置は、政治の力によって善処出来る筈だと茶山は考える。しかるに幕府や藩府は、事態に対する適切な措置を執らず、むしろ農民からの税収を厳しくし、「不違農事」の鉄則を破って苛酷な出役を課す。江戸に於いては絶対的権力を握っていた田沼意次・意知親子に

よる賄賂政治が行われ、福山藩に於いては藩主の威光を笠に着た奸臣による悪政の為、特に農民には莫大な負担が掛けられた。江戸詰めの藩主は領土の窮状に疎く、領民の為の政治が為されない。人々の憤懣は頂点に達した。

茶山もその怒りを露わにした詩を作っている。それは、遊学期の頃のものとは比較にならないほど厳しいものであった為に、板本には載せられていない。「草稿」『黄葉夕陽村舎詩』巻一・二・三には板本には載せられなかった政治批判の詩が三十首余りも見える。そこに載せられている詩は全て頼山陽が目を通し、「恐らくは忌を干さん」とか「諱に触れん」等の評を付している。中国の史実に準えた形式のものが多いが、当時の幕政を非難した内容であることは、一読して明瞭である。「諱に触れんことを恐るるも、抑も事は已に逝けり。妨げざるか」（幕府の忌諱に触れるかも知れないが、まあ年月も大分経っているから大丈夫だろう）と山陽が評した詩も、茶山は板本からは省いている。このような過激とも思える政治批判詩を作っていた頃の茶山は、田沼政治を徹底的に糾弾する西山拙齋や、意次の政治を批判した姫井桃源、同じ朱子学を遵奉する頼春水・杏坪兄弟等と親密な交友を重ねていたので、この人たちの影響も大いにあったであろうし、青・壮年期特有の「悪」を許せない純粋な精神の現れでもあったであろう。

しかし、茶山の厳しい政治批判詩は次第に影を潜めてゆく。郷土に根を下ろして塾を経営し、その塾をやがては郷塾として藩に移管する決意をした（寛政八年、一七九六。四十九歳）茶山は、表立って政治批判をしてはおれない。政治批判詩は農村詩の中に形を変えて詠まれてゆくようになった。農家の出身[4]である茶山にとって農民は仲間である。農民の苦労は人事ではなかった。その苦労を為政者に分かって貰い、その苦労が報われるような政治をして欲しいと願わずにはおれなかったのである。「世が泰平であるのは農夫たちの労働の賜である」（「江良路上」後巻七）と詠じているように、この国を支えているのは農民であるという思いが茶山には常にあった。

注

（1）『休否録』が編まれたのは、序の「休否録引」に「寛政二（1790）年を「今歳」としていること、また「休否録引」の記事で最も新しいのが寛政二年五月のものであることなどから、寛政二年頃と推測される。「休否」の意味は、全てが行き詰まってしまうこと。

（2）小財陽平「『黄葉夕陽村舎詩』前篇巻一の編纂事情――「忌諱に触れる」作品をめぐって――（『近世文芸』87日本近世文學會）参照。

（3）茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』には、文化九年（1812、茶山65歳）刊の「前編」八巻。文政六年（1823、76歳）刊の「後編」八巻。天保三年（1832、没後）刊の「遺稿」七巻がある。今ここでは「前編」について問題にしている。

（4）茶山の「贈肥後藪子厚」詩に「我本農家子、生長事耦耕。

一朝改舊業、追師學聖經」（我は本（もと）農家の子、生長して耕耕を事とす。一朝 舊業を改め、師を追ひて聖經を學ぶ」とある。